

日本 18 世紀学会
第 41 回全国大会レジュメ集

2019 年 6 月 8 日 (土)・9 日 (日)

中部大学 (春日井キャンパス)

〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1 2 0 0

日本18世紀学会 第41回全国大会レジュメ集

I. 自由論題報告要旨

- 報告1「旅行記の啓蒙的機能」大林 侑平（名古屋大学大学院）
報告2「ディドロの「理想的モデル」論」杉野 駿（東京大学大学院）
報告3「啓蒙とフィクション」斉藤 渉（東京大学）
報告4「ショワジー城のギャラリー装飾画」太田 みき（学習院大学）
報告5「バーク美学思想の政治・経済思想的含意」中澤 信彦（関西大学）
報告6「リヨンの印刷業者レギヤによる海賊版『社会契約論』（1762年）制作の舞台裏」
坂倉 裕治（早稲田大学）
報告7「マブリ『穀物取引について』の背景」菅原 多喜夫

II. 共通論題趣旨説明

- 共通論題I「思想史とジェンダー」 安藤 隆穂（中部大学 中部高等学術研究所）
共通論題II「《近代の形成》における古代表象の諸相」玉田 敦子（中部大学）・深貝 保則
（横浜国立大学）

III. 共通論題報告要旨

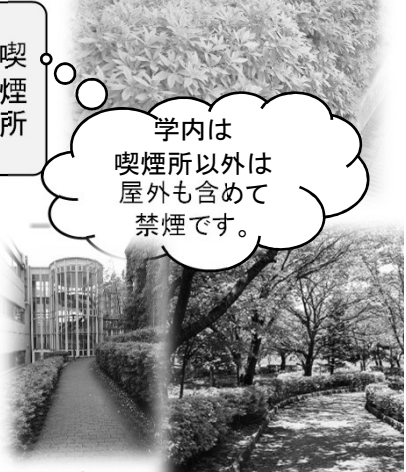
共通論題I

- 報告3 「権力・男色・英雄・紳士」渡辺 浩（東京大学名誉教授・法政大学名誉教授）

共通論題II

- 報告1「ディドロ美学における古代と近代」青山 昌文（放送大学）
報告2「自由の敵」川出 良枝（東京大学）
報告3「時空間における多数性への転回」坂本 貴志（立教大学）
報告4「表象のアンクル」深貝 保則（横浜国立大学、コーディネーター・司会）

受付 (21号館1階)
主会場・休憩室／展示会場 (22号館1階)



喫煙所

学内は
喫煙所以外は
屋外も含めて
禁煙です。

21・22号館と
メモリアルホールとの近道

主会場入口
自由論題
共通論題
総会等
22号館
2215教室

休憩室／展示会場
22号館
221Aゼミ室

第 1 日 6 月 8 日 10:10-11:00

会場：中部大学 2215 教室 (経営情報学部 22 号館 1 階)

自由論題報告 (1)

旅行記の啓蒙的機能—18 世紀ドイツ語圏における知的文脈を踏まえて—

大林侑平 (名古屋大学大学院)

司会：今村 武 (東京理科大)

本発表の目的は、18 世紀ドイツ語圏の知的文脈において、数多く出版された旅行記がいかなる素材を提供し、啓蒙的機能を担い得たのかを考察することである。

18 世紀の旅行記は、これまで自然誌的・地理学的記述、大都市や自然の主観的経験、文明・社会批判、自伝的要素など個別のトピックに焦点を当てて研究されてきた。また、旅行記は旅行の目的によってトピックや書き方が変化するテキストであり、その統一的な特徴を掴むことが困難である。とはいえ、旅行記は一貫して、新奇かつ経験的に妥当な知識を他の地域からもたらし、自他の共同体に対する政治的・道徳的な省察を呈示した。その結果、諸地域の Nation ないしは Volk を巡る考察の素材となった。

Nation ないしは Volk を巡る考察は、空間的にも時間的にも可能である。前者が気候理論に基づく地理学的考察、後者が歴史記述と関連した出来事の叙述である。そもそも 18 世紀中葉までに、新旧論争を通じてヒポクラテス以来の気候理論や新しい歴史意識がドイツに輸入された。そうした知的文脈が、旅行記の記述を規定した。同時に、旅行記はそうした議論の素材や根拠でもありえ、補完的な関係を有していた。こうした旅行記として、Johann Wilhelm von Archenholz (1743-1812) の『イギリスとイタリア』 *England und Italien* (1785) が典型的である。

また、啓蒙の過程にあつて知的好奇心の刺激は、趣味の涵養とともに重要な動因であった。この時、旅行記は新たな知識をもたらすものとしても、また美的経験を叙述的に伝えるものとしても機能したと考えられる。実際多くの旅行記が、百科全書的な構想に沿って編集され、人々に提供された一方で、美術作品や自然の印象を人々に伝えたのである。例えば Mattias Christian Sprengel (1746-1803) は『民族国土論集』 *Beiträge zur Völker- und Länderkunde* (1781-1790) や『新・民族国土論集』 *Neue Beiträge zur Völker- und Länderkunde* (1790 - 1793) を編集し、世界中の旅行記を数多く出版した。

以上は世界認識に寄与する旅行記に関する考察であったが、一方で実践に寄与する旅行記も存在した。産業や政治、道徳的なトピックを含むそうした旅行記は、『ドイツ叢書』 *Deutsches Museum* (1776-1788) などの雑誌に掲載され、政治的理念や文明批判を公衆に提供した。したがって、旅行記を認識的性格と実践的性格に区分し、これを教育や啓蒙における同一の区分と重ねることで、旅行記が 18 世紀ドイツ語圏で果たした啓蒙的機能をより明確にすることができると思われる。

第1日 6月8日 11:10-12:00

会場：中部大学 2215教室（経営情報学部22号館1階）

自由論題報告（2）

ディドロの「理想的モデル」論—先行する芸術理論の批判と参照点としてのプラトン—

杉野 駿（東京大学大学院）

司会：馬場 朗（東京女子大学）

本発表では、ディドロの『百科全書』項目 ADMIRATION から『劇試論』のアリストの独白までは趣味判断にかんする議論のなかにあらわれていた「理想的モデル」概念が、『1767年のサロン』序文と『俳優に関する逆説』などで芸術制作を論ずるのに応用された契機を、バトゥとヴィンケルマンの芸術理論への、プラトンのイデア論を用いた批判的応答として捉えなおすことを目指す。

『1767年のサロン』の序文によれば、「理想的モデル」は経験と実在的自然の研究から抽象される諸存在の範型であり、芸術家はこれを頭のなかに措定することで、実在的自然を超越する普遍性を刻印された作品を制作する。

先行研究では、Else-Marie Buckdahl や Wolfgang Drost が「理想的モデル」論の先行理論への応答とイデア論の利用の側面に注目している。また、佐々木健一はこの理論を『絵画論』の厳密な自然模倣理論との関連で捉え、吉成優は項目「ADMIRATION」から『1767年のサロン』までの「理想的モデル」概念が多様な美的判断の調停のための到達不可能な極点として定位されていることを示した。しかしいずれの論者も、先行理論への批判におけるイデア論的位階の採用の意義には踏み込んで論じていない。

『1767年のサロン』序文のディドロの意図は、実在的自然や古代芸術といった、権威として固定されうる参照項を批判し、手探りの自然研究と熟慮に基づく制作理論を形成することにあつたと思われる。このような経験と熟慮による実践の価値を理論的に説明するためにディドロが利用したのが、プラトンのイデア論の枠組みである。この『1767年のサロン』で強調された模倣対象の存在論的価値階梯の理論は『逆説』の「冷静な俳優」による模倣の理論にも引き継がれていく。

そこで発表者は、プラトンの『国家』で展開されるイデア論との理論的関わりから「理想的モデル」概念を照射することを試みる。まずバトゥの「美しい自然の模倣」論とヴィンケルマンの「ギリシア芸術の模倣」論を批判しながらディドロは「理想的モデル」概念を彫琢した。そしてプラトンの『国家』を明示的に参照しながらイデア論の存在論的価値階梯を利用することで、「理想的モデル」の模倣行為にもとづく芸術作品に、実在的自然より上位である第二等の位階を認めることができた。こうしてディドロは感覚と観念という伝統的二分法をのりこえ、芸術作品の価値の源泉を、実在的な模倣対象の性質ではなく芸術家の経験と熟慮に基づく実践に求める道を開いたのである。

第 1 日 6 月 8 日 13:30-14:20

会場：中部大学 2215 教室（経営情報学部 22 号館 1 階）

自由論題報告（3）

啓蒙とフィクションー『ベルリン月報』グロシンガー書簡を中心にー

齊藤 渉（東京大学）

司会：隠岐 さや香（名古屋大学）

1783 年にビースターとゲーディゲの創刊した『ベルリン月報』は、啓蒙の自己理解をめぐるドイツ語圏での議論において中心的な役割を果たした。メンデルスゾーンとカントの啓蒙の定義に関する 1784 年の有名な論文（「啓蒙とは何か」）は、周知のとおり、こうした議論を背景として書かれている。

同誌には、読者からの手紙とされる記事が少なからず掲載されているが、これまでの研究で指摘されているように、その多くは、同誌の編者二名をメンバーに含む「ベルリン水曜会」での講演をもとに公刊されたものだった。

本発表では主に「クサヴェーリウス・グロシンガー」を著者とする書簡（1784 年 9 月号）と同グロシンガー氏の死亡記事とされる記事（1785 年 2 月号）をあつかう（以下、この二つの書簡を「グロシンガー書簡」とする）。同書簡は、ベルリン水曜会の中心的メンバーの一人 J. C. W. メーゼンによるものと考えられているが、ベルリン国立図書館でウェブ公開されている手稿資料をもとに、著者問題を再検討するとともに、グロシンガー書簡が当時の思想史的な脈のなかで担っていた役割を考察したい。

これまでの研究にしたがえば、グロシンガー書簡は、当時しばしば見られた虚構の書簡の一事例ということになるだろう。本発表もこの想定を前提とした上で、メーゼンがどのような意図で架空の著者による投稿という体裁を選んだのか、また、なぜクサヴェーリウス・グロシンガーという（非実在の）人物が書簡の著者として選ばれたのかという問いの解明を試みる。

具体的には、グロシンガーの「いとこ」とされるウィーン出身の（実在の）ヨーゼフ・グロシンガーの著作のほか、ヨーゼフの実弟フランツ・マテウス・グロシンガー（別名フランツ・ルードルフ・フォン・グロシグ）の大がかりな詐欺事件、さらには、この書簡前後の思想史的出来事や、同時代のプロイセンとオーストリア（ないしハンガリー）をめぐる複雑な国際関係に論及しつつ、ベルリンの啓蒙主義者たちが思い描いていた啓蒙の「敵」のイメージを浮かび上がらせる。

こうした論証を通じて、『ベルリン月報』を中心とする啓蒙主義者たちによる啓蒙観を逆照射し、特に、彼らの自己理解を強く規定していたと思われる、啓蒙を脅かすものの描像がどのようなものであったのかを示したい。

第 2 日 6 月 9 日 9:00-9:50

会場：中部大学 2215 教室 (経営情報学部 22 号館 1 階)

自由論題報告 (4)

**ショワジー城のギャラリー装飾画
—国王をめぐるイメージ戦略と王宮装飾画の変容について—**

太田 みき (学習院大学)

司会：金沢 文緒 (岩手大学)

1764 年、王立建造物局長官マリニ侯爵の命により、アカデミー書記長シャルル＝ニコラ・コシャンは、ショワジー城のギャラリーの装飾として、当時の主要画家たちにローマ皇帝の歴史画 4 点と美徳の擬人像を描く寓意画 2 点を注文した。この作品群はルイ 15 世に拒否されたため、ロココから新古典主義へと向かう過程で試みられた歴史画復興の失敗例とされてきた。本発表では、プログラムの再考を通じて、この装飾画を当時推進された平和的で慈悲深い君主像のプロパガンダの中に位置づけ、王宮装飾画の役割の変容に関連づけて、美術行政官たちの意図と国王の趣味が衝突した経緯を明らかにする。

公的空間であるギャラリーには、武力や権威を表す主題が好んで描かれてきたが、コシャンは古代を基軸に革新的なプログラムを考案することにこだわった。J.-M. ヴィアン、N. アレ、C. ヴァン・ロー、L.-J.-F. ラグルネが《民衆に食料を与えるマルクス・アウレリウス》、《ヤヌスの神殿を閉めるアウグストゥス》、《正義をもたらすトラヤヌス》、《奴隷を解放するティトゥス》を制作し、ラグルネはさらに《善良と恵み深さ》と《正義と寛容》の扉上部装飾画を手掛けた。

四人の皇帝の偉業の中で、これらの場面は挿絵には描かれても、大規模な装飾画としてはほとんど前例がなく、本作品群は「民衆に幸福をもたらす寛大で人間性に溢れた行為」のみに焦点を当てた点で画期的である。この構想は当時急務であった国王のイメージアップ戦略に関連している。かつて「最愛王」と呼ばれたルイ 15 世は、フランスが国際的威信を低下させる結果となった七年戦争に対する批判にさらされていた。本装飾画は戦後のパリ条約締結の翌年に注文されており、王の治世を描いたパリ市庁舎の装飾画と同様に、プロパガンダの一環だったと思われる。

しかし王は本装飾画の撤去を命じた。ここには、王宮装飾に関するコシャンと王の認識の相違が看取される。コシャンはショワジーを社会的な意味を付与した歴史画の刷新を試みる場と考えたが、これは親密な空間と快い主題を好む王の趣味と合致しなかった。1760 年代には歴史画推進を目指すあまり、行政側が先走るという現象が起こる。かつて国王の権威を顕示する役割を担っていた王宮装飾が、画家たちを競争させ、美術の進歩を示す場として利用されていくのだ。本装飾画の制作と受容を事例として、王権の称賛から公共への貢献に美術の役割が変化していく過程を考察してみたい。

第 2 日 6 月 9 日 10:00-10:50

会場：中部大学 2215 教室 (経営情報学部 22 号館 1 階)

自由論題報告 (5)

バーク美学思想の政治・経済思想的含意について

中澤信彦 (関西大学)

司会：桑島 秀樹 (広島大学)

本報告の目的は、エドモンド・バークの美学思想の政治・経済思想的含意を探ることにある。彼は「社交性」と「自己保存」を人間の情念の二大目的として措定する。前者と関わる「積極的な快」を「快」と呼び、「美」と結びつけ、後者と関わる（「苦の除去」から生じる）「相対的な快」を「歓喜」と呼び、「崇高」と結びつける。彼によれば、美は「小ささ」「滑らかさ」などの女性的な諸特質を有し、人間に満足感や安らぎなどの喜びを与える（神経の弛緩）。それに対して、崇高は「曖昧さ」「無限性」などの男性的な諸特質を有し、初見の印象としてはむしろ人間の心におそれを与え、むしろ精神を高揚させる（神経の緊張→活性化）。本来人間にとって不快な感情であるはずの恐怖が、ある種の美的感動をもたらし、それが芸術の主要な効果となりうることを、彼は発見し定式化した。概ね以上のような内容を示す初期（政界進出以前）の美学論文『崇高と美』（1757）は、商業の発展の基礎としての安定した習俗を美的観点から考察した書物としても読むことができる。だからこそ、彼は後年の『フランス革命の省察』（1790）でフランス革命による習俗の破壊を、商業の破壊としても告発できた。その際に彼が議論の力点を「崇高」から「美」へより具体的には、おそらく彼の議論に占める経済（商業）論の比重の高まりに呼応した、美と密接な関係を有する習俗へ一と移動させていることは、もっと注目されてよい。このような重心移動は、彼の美学的な労働（者）観からも確認できる。労働は努力を必要とするという意味では苦痛だが、その苦痛の克服から喜悦が得られるのであり、その意味で崇高体験なのだ。奢侈がもたらす神経の弛緩—美の原因—は、活動の停滞と怠惰へと人々を誘い社会を墮落させる傾向を持つが、崇高はそうした悪しき傾向を抑制する。また、美と密接な関係を有する野心についての彼の議論は、経済発展の原動力に関する哲学的洞察を含む。このように若きバークは美的観点から商業社会の自己調整と自己発展のメカニズムを解き明かそうとした。しかし、『省察』では、過酷な労働は崇高体験としてではなく全体的効用の観点から正当化された。最後に、以上の議論を踏まえて、『崇高と美』とスミス『道徳感情論』との歴史的・知的関連についても考察する。

第 2 日 6 月 9 日 11:00-11:50

会場：中部大学 2215 教室 (経営情報学部 22 号館 1 階)

自由論題報告 (6)

リヨンの印刷業者レギヤによる海賊版『社会契約論』(1762 年)制作の舞台裏

—— アンジャン・レジーム 旧体制下フランスにおける禁書・海賊版の地下出版と出版統制の綾 ——

坂倉裕治 (早稲田大学)

司会：逸見 龍生 (新潟大学)

デイドロおよび『百科全書』に関する研究で知られるジャック・プルーストは、『日本というプリズムを通して見た 16 世紀から 18 世紀のヨーロッパ』において、文化の伝播においてオリジナルの作品を模造した、いわば「まがいもの」が大きな役割を演じた事実を見事に描いて見せた。西洋の近代解剖学を日本に伝えたのは、立派な医学書ではなく、医学部で用いられていたありふれた教科書であった。また、遠近法を学ぶ手がかりを与えたのは、有名な油彩画の模写から制作された安価な版画であった。こんにちに置き換えるならば、美術館の売店で販売しているポスト・カードのようなものが、文化の伝播において想像を越えた影響力を及ぼすことがあることを示したのである。思想の流通においても、「まがいもの」が無視し得ない役割を演じたことがまちがいない。それを示す一事例として、本発表では、リヨンの印刷・書店業者レギヤ (Jean-Baptiste Réguilliat, 1727-71) によって印刷されたルソー『社会契約論』の海賊版 (1762 年) をとりあげ、この版本が制作された背景、この版本が引き起こした騒動とその顛末 (レギヤの現行犯逮捕、投獄、失職)、さらに、この版本が及ぼした想像を越えた影響力の一端を示したい。この作業を通じて、旧体制下フランスにおいて、書物の事前検閲制度にどのような不備や抜け道が存在していたのか (たとえば、エルヴェシウスの『精神論』やルソーの『エミール』など、リヨンで同じ様に海賊版や禁書を印刷していながら、処罰の対象とならなかったジャン＝マリ・ブリュイゼのような業者も存在する)、なぜ、危険を冒して禁書や海賊版を秘密裏に印刷する (地下出版する) 業者が現れたのか、そうした業者が本来の手続きでは印刷されえなかったはずの作品が日の目を見ることにいかに貢献するところがあったのか、このような業者をいかに巧みに啓蒙思想家たちが利用したのか、といった問題に接近するための有力な手がかりが得られるかもしれない。

第 2 日 6 月 9 日 13:00-13:50

会場：中部大学 2215 教室 (経営情報学部 22 号館 1 階)

自由論題報告 (7)

マブリ『穀物取引について』の背景

菅原 多喜夫

司会：安藤 裕介 (立教大学)

フランスの政治思想家マブリ(1709-85 年)の遺作のなかに『穀物取引について』と題された未完の小品がある。この作品は、1775 年に起こった「小麦粉戦争」と呼ばれる民衆暴動をきっかけに執筆されたものとみられるが、これまで政治思想史の分野でも経済思想史の分野でもとりあげられることがほとんどなかった。本発表では、この作品とその周辺を分析しながら、マブリの執筆意図の解明をめざす。

『穀物取引について』は、主部と結末部分に分けられ、主部では、フィジオクラートの架空の人物との対話をとおして、民衆の困窮を理由に穀物取引の自由に反対するマブリの見解が述べられる。

結末部分では、18 世紀の経済思想史が簡単に回顧され、グルネー(1712-59 年)との出会いについてふれられる。グルネーはケネー(1694-1774 年)とならびフィジオクラシーの自由主義的な経済理論を準備したとされる人物だが、その活動や思想を記した資料は少なく、短いものながら、グルネー本人から直接その考えをきいたとするマブリの証言は貴重である。マブリはどのような機会にグルネーと会ったのであろうか。また、グルネーから何を学んだのであろうか。

一方、小麦粉戦争のきっかけになったのは、ルイ 16 世の財務総監テュルゴー(1727-81 年)がすすめた穀物取引自由化政策である。テュルゴーは、当初グルネーに経済思想を学びながら、グルネーが亡くなるとケネー派に接近し、通常は、ケネーの思想を政治家として実践したとされる。穀物取引規制をめぐる正反対の見解をもつマブリとテュルゴーであるが、両者の思想は完全に調停不可能なものであろうか。

この問題をさらに追及するため、グララン(1727-90 年)と二人の関係を確認する。すなわち、グラランはリモージュ農業協会の懸賞論文募集に応じた『富と租税についての分析試論』(1767 年)のなかでマブリを称賛し、フィジオクラシーの理論を批判しているが、テュルゴーはこの論文を評価した。テュルゴーには、他のケネー派思想家と違って、グラランの思想を受け入れるだけの柔軟さがあったと考えられる。

この事実を媒介にして、マブリとテュルゴーの小作農の位置づけを検討し、フランス社会の危機の時代に、一見対立する立場にいた二人の思想家が、現実的には同じ方向の打開策を模索していたことを確認する。

第 1 日 6 月 8 日 14:40-16:40

会場：中部大学 2215 教室（経営情報学部 22 号館 1 階）

共通論題 I 趣旨説明

「思想史とジェンダー」

司会・コーディネーター：安藤 隆穂（中部大学 中部高等学術研究所）

講演者 水田 洋（中部大学 中部高等学術研究所客員教授・名古屋大学名誉教授）

「近代的個人の導入」

水田 珠枝（名古屋経済大学名誉教授）

「フェミニズムの生成と課題」

渡辺 浩（東京大学名誉教授・法政大学名誉教授）

「権力・男色・英雄・紳士—江戸と明治の男性理想像—」

1789 年にフランスで発布された「人間および市民の権利の宣言」の「人間」が女性を排除しており、これに抗議したオランプ・ド・グージュが処刑されたように、近代において女性も歴史の主体の位置を剥奪されてきた。思想史研究あるいは思想史的態度の歩みは、19 世紀末に始まり、西欧近代の危機的状況への精神史的反省を根本問題としていたが、その思想史研究においても、依然として、ジェンダーへの問いが前景化することはなかった。

ジェンダー的視点からの個別思想研究にとどまらず、思想史の中にジェンダーを文脈として組み込むという問題意識が明示的になったのは、前世紀終盤の出来事であった。多様な思想史研究分野の中で、たとえば社会思想史の場合で見れば、水田珠枝『女性解放思想の歩み』（1973 年）および『女性解放思想史』（1979 年）が、民衆やマイノリティーへの視点とともに、戦後社会思想史研究の黙殺してきたジェンダー的問題を衝撃的に提起し、「期待の地平」を変容したのであった。それからほぼ半世紀を経た今、「思想史とジェンダー」という問題は、やはり、思想史研究の基本的枠組みを問い直すという次元で衝撃を与え続けている。

この共通論題では、水田珠枝会員による半世紀以上にわたる女性解放思想史研究の回顧と展望を中心軸にして、思想史がなぜジェンダーという視点を軽視したのかを問い直すとともに、「思想史とジェンダー」という問題のアクチュアリティを検証していきたい。現在、水田洋会員によって、かつての著作『社会科学の考え方』（1975 年）の大幅改稿が進行中であるが、その増補部分の最重点問題として「ジェンダー論」を水田珠枝会員が執筆中である。この作業の内情を報告していただくことを本共通論題の礎石設定としたい。

水田洋会員は社会思想史の学問としての樹立を中心的に担った一人であり、『女性解放思想の歩み』（および『女性解放思想史』）の挑戦を真正面から受け止めたのであって、いま、「社会科学の考え方」再構築の共同作業の中で、「社会思想史とジェンダー」についてどの

ように考えるかを報告いただく。お二人の共同作業が論争的であることが示されるだろう。

さらに、渡辺浩会員には、「江戸と明治の男性理想像」をテーマに、18 世紀日本のジェンダーの構造に切り込んでいただく。具体的には、まず 17 世紀に始まる徳川の世において、主流の男性理想像とはいかなるものだったか、そして、それがどう変化したかを論じていただく。その変化が、あのような明治革命をもたらす一因になり、さらにその後の男性像の展開を用意したのではないかというのが報告の主旨である。

報告者それぞれは異なる研究分野間の緊張を持ち込むだけでなく、西欧から東アジアにわたる、また近代より現代にいたる、時間的空間的に大きな守備範囲を持つ点において、多様で多元的な諸論点に切り込む議論を展開していきたい。

第 2 日 6 月 9 日 14:00-17:10

会場：中部大学 2215 教室 (経営情報学部 22 号館 1 階)

共通論題 II 趣旨説明

「《近代の形成》における古代表象の諸相」 (趣旨説明)

コーディネーター・司会： 玉田 敦子 (中部大学)
深貝 保則 (横浜国立大学)

講演者 青山 昌文 (放送大学)「デイドロ美学における古代と近代」
川出 良枝 (東京大学)「自由の敵—暴君批判における古代と近代—」
坂本 貴志 (立教大学)「時空間における多数性への転回—カントの「普遍自然史」
とコスモポリタニズムの理解のために—」
深貝 保則 (横浜国立大学)「表象のアングル—抱き、漂い、移ろう—」

ヨーロッパに「近代」が生成する過程において、古典古代の表象は本質的な役割を果たしてきた。17 世紀終盤以来の近代と古代の優劣を比較する論争における「古代」は、古代ギリシア、もしくはローマ帝国であった。しかし西欧近代にあって、まさに「いま」としての近代を捉える時代意識の枠組みとしては、古代と近代の比較がこのような形でなされたばかりではない。近代の時代意識のなかに併存している多様な歴史ビジョンは、文化潮流の交錯を示すだけでなく、近代国家のアイデンティティ形成の根幹をなしている。

成立しつつある「近代」の内実を自覚的に捉えるうえで、まず 17 世紀以来、ギリシア・ラテンの古典をめぐって展開された「近代古代論争」においてはしばしば、《近代》の優越を示すことが志向された。また、近代国家のアイデンティティ形成においてはヨーロッパにおける国家間の熾烈な争いが影を落とし、たとえばフランスにおける王権は、古代ローマ帝国の正統かつ正当な継承者であると証明しようとしていた。このためフランスは、ラテン語に替わってフランス語を新たな共通言語とするために国家機関、アカデミー・フランセーズを設立し、イエズス会などの修道会にフランス語による修辞学教育を委ねた。

このように古典古代とのコントラストにおいてそれぞれの時代における「いま」のありようを問うという営為は、西欧において本質的な事柄であった。そこで本共通論題においては、「《近代》とは何か？」という課題を見据えつつ、近代国家もしくは近代文明の形成・展開において「古代表象」が果たした役割を主題的に取り上げる。第 1 報告「デイドロ美学における古代と近代」(青山昌文)は、18 世紀フランスの劇場に批判的であったデイドロの美学にとって、古代こそが近代を支える基盤であったことを示す。第 2 報告「自由の敵—暴君批判における古代と近代—」(川出良枝=非会員)は、カエサルに屈することを是としなかった小カトーをめぐる英仏での論じ方の違いに着目しつつ、暴政とは何

か、あるいは自由とは何かについての「啓蒙の世紀」の問いかけを検討する。第3報告「時空間における多数性への転回—カントの「普遍自然史」について—」（坂本貴志）は、「古代」を描きだす「近代」の側の表象の方法と、「古代」から伝わる表象の方法をめぐっての近代の側の捉え方との違いを手掛かりとして、カントの「普遍自然史」における時空間の捉え方を検討する。そしてこれら3報告を承けてコーディネーターの側から、第4報告「表象のアングル—抱き、漂い、移ろう—」（深貝保則）がなされる。そこでは「古代」を表象する「近代」の側の時空感覚の多様性に着目しつつ、近代以降における古代および古代表象への「科学」的な検討がしばしば、古代から近代へと通底するものを見出そうとする意識とのあいだに緊張が生じてきた次第にも触れる。

共通論題I 報告(3)

権力・男色・英雄・紳士—江戸と明治の男性理想像—

渡辺 浩（東京大学名誉教授・法政大学名誉教授）

18世紀の日本では、統治者はみな男だった。政府は男性のみで組織されていた。つまり、性別が、支配・被支配と、直接に、あからさまに関連していた（現在は、建前上、関連していない。しかし、事実上は関連している）。にもかかわらず、女性たちがそれに不満を示した例はまず見受けられない。不服従運動も起きなかった。何故だろうか。

当時の人に質問すれば、「男の人達が治めるのは当たり前でしょう」と、多くの場合、答えるだろう。では、なぜ「当たり前」と思えたのか。それは、「男とはこういうもの」「男ならこういうものであるはず」という思い込みがあったからである。そして、その思い込みがあったからこそ、そのような政治体制が機能し続けたのである。また逆に、そのような政治体制だから、「男とはこういうもの」という意識が維持された。つまり、制度と意識は、相互に支え合っていたのである。そして、無論、その男性像・男性理想像は、女性像・女性理想像と対（つい）になっていた。つまり、「男」と「女」との組み合わせとなっているジェンダーの構造（それは、セクシュアリティとも深く関連している）——それが分からないと、その政治体制も分からない（ヨーロッパでも同じであろう。18世紀フランスを理解しようとする場合にも、フランス革命を理解するためにも、その解明は必須のはずである）。

本報告では、17世紀に始まる徳川の世において、主流の男性理想像とはいかなるものだったか、そして、それがどう変化したかを論じる。おそらくその変化が、あのような明治革命をもたらす一因になり、さらにその後の男性像の展開を用意したのである。

なお、次の拙稿を参照していただければ幸いです。

① 「「性」の不思議」（『日本政治思想史：17－19世紀』東京大学出版会、2010年、第16章）

② 「アレクシ・ド・トクヴィルと三つの革命：フランス（1789年～）・日本（1867年～）・中国（1911年～）」（三浦信孝・福井憲彦（編）『フランス革命と明治維新』白水社、2019年、第3章）

共通論題 II 報告（1）

ディドロ美学における古代と近代

青山 昌文（放送大学）

ごく一般的な理解においては、ディドロは、啓蒙思想家として、近代を切り開き、多くの分野において革新を成し遂げようとした人物であるが、しかし、ディドロは、本質において、矛盾に満ちた人物であるがゆえに、その思想は、統一的な理解を困難にするものであり、むしろ、その矛盾を、矛盾として、積極的に受け止めることが、望ましい、ということが、しばしば、語られている。

これは、話を演劇論に限ってみても、しばしば、語られていることであって、ディドロは、「市民劇」を提唱することによって、古典主義演劇理論からの脱却を唱えたにも拘わらず、古典主義演劇理論の「3 単一の規則」を擁護したのは、矛盾であるとか、あるいは、少なくとも、理論的不徹底である、と言われることが多い。

しかし、果たして、そうであろうか？ ディドロは、矛盾の人であり、古い思想と新しい思想の間で揺れ動き、不徹底であったのであろうか？

私は、以上に紹介したような、ディドロ像の根本的な誤りを、指摘したい。

ディドロは、決して、矛盾ないし不徹底の人ではなかった。ディドロは、見事に一貫した哲学・美学を打ち立てた思想家であったのであり、彼の美学には、何の理論的矛盾も存在してはいないのである。

演劇論に限ってみても、ディドロの提唱する、近代においてあり得べき「市民劇」の見事な実作例は、驚くべきことに、古代ローマの劇作家テレンティウスの《義母》なのであるが、これは、ディドロの矛盾ないし不徹底の表れではなく、ディドロ美学が、古代的なるものと、近代的なるものを、深い深度で、理論的整合性を持ちながら、統一していることの表れなのである。

ディドロにとって、古代は、実に、素晴らしい面を持っていた。彼は、若い頃から演劇に熱中し、生涯を通じて、芝居小屋に通い詰めていたが、それにも拘わらず、というよりも、むしろ、そうであるが故に、18 世紀当時のフランスの劇場には否定的であって、古代ギリシア・ローマの野外大劇場の素晴らしさを称揚していたのである。

そして、そもそも、ディドロ美学の根本は、古代のプラトンやアリストテレスが打ち立てたミーメシス美学なのであって、そのミーメシス美学の豊かな伝統の上に立って、ディドロは、近代における最初期となる、本格的な、それ自体芸術作品と呼べる魅力的な文章で、美術批評を行ったのである。

近代と近代主義を区別して語るならば、ディドロ美学において、近代は、古代の否定の上に成り立つものではない。ディドロ美学においては、古代こそが、近代を支えている基盤なのである。

共通論題 II 報告（2）

自由の敵—暴君批判における古代と近代—

川出 良枝（東京大学）

統治や政治に関する 18 世紀の議論において、古代ギリシア・ローマの制度・歴史・思想が果たした役割は重要かつ広範であった。名誉革命をへて、共和政体（あるいは「君主のいる共和政」）を樹立したイングランド（ブリテン）では、一方で議会在が主権を掌握し、他方で強力な執行権も存続させ、両権の間でバランスをとるといふ国家構造への党派を超えた同意が形成された。混合政体として顕揚されてきた共和政時代のローマはこの体制にとってきわめて有効なモデルであった。だが、統治論における古代表象は、制度的側面につきるわけではない。ここでは、「暴君」「暴政/僭主政」に関する表象に注目することにしたい。端的に述べれば、暴君とは自由の敵であった。自由を守るといふ課題において、「近代」は「古代」の事例を大いに参照し、かつ、学ぶべき過去の教訓として、古代の市民たちの戦いぶりに一定の留保や批判を含む論評を行った。

自由の敵である暴君と果敢に戦った古代の英雄として、18 世紀に最もよく論じられたのがウティカのカトー（小カトー）であることはよく知られている。腐敗と無縁の清廉潔白の士にして、カエサルに降伏することを是とせず、自死を遂げたカトーは、良くも悪くもローマの代表的な共和派とみなされた。ブリテンの場合、アディソンの悲劇『カトー』（1713）のめざましい成功が一つの契機となり、その名はウォルポール体制批判の政治的シンボルとなる。その後も時代を代表する論者によって、カトーの事績を歴史的・哲学的に論評する試みが輩出する。他方、王政下のフランスにおいて、共和派にして、宗教上のタブーである自殺をとげたカトーはどのように論じられたのか。隣国のような、同時代の政治と連動した華々しい扱いを得ることはなかったが、その分、敵役のカエサルやキケロをはじめとするカトーと関わりの深い人物とカトーとが対比され、カトー像は複雑な様相を示す。フランスでは悪しき政治を示す新しい語としてデスポティズムという概念が台頭したことも、その古代表象の多層性を生む要因となる。フェヌロン（『死者の対話』）、モンテスキュー（『キケロ論』『ローマ人盛衰原因論』）、ルソー（『ソクラテスとカトーの対比』『エコノミー・ポリティーク』『新エロイズ』）等のカトー像を分析することにより、暴政とは何か、あるいは自由とは何かについての「啓蒙の世紀」の問いかけを検討する。

共通論題 II 報告 (3)

時空間における多数性への転回—カントの「普遍自然史」について—

坂本 貴志 (立教大学)

「古代表象」にはその表象の方法として、二種あるとまずは考えられる。「古代」を近代において描く表象の方法と、「古代」から伝わる表象の方法そのものを、近代においていかに受け止めるか、という方法と。後者の方法には、17 世紀以降の、聖書やヘルメス文書の文献学的研究に代表されるような、自然と人間の歴史記述の内容とその方法の批判的な受容と、またアリストテレスを始めとする様々な自然学の更新が含まれると考えられる。後者の方法をとおして、たとえば聖書の歴史記述に基づく「普遍史」からは切りはなされた「古代」と、「自然史 (博物学) *Naturalis historia/ Naturgeschichte/ Histoire naturelle*」の中の一部門としての「地球の (生成の) 理論」が出てくる。前者の方法、古代をいかに表象するか、という問いは、後者の方法、古代から伝わる表象をいかに受容・更新するか、という問題設定の上ではじめて可能となるだろう。

プリニウスに始まるのが「自然史」であるが、カントの『普遍自然史ならびに天界の理論 *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels*』(1755) は、後者の問題設定に関して、二つのパラダイムの転回をそもそも下敷きしている。1. オットー・フォン・ゲーリケが証明した「真空」における原素材の集合による、惑星系と恒星系の形成についてのカントの説明は、「真空」そのものを否定したアリストテレスの空間認識の否定の上に成立している。有限かつプロトマイオス的なアリストテレスの空間イメージは、真空かつ無限の空間という、もともとはエピクロス=デモクリトスの原子論的空間のフォーマットによって更新される。この点はトマス・クーンによって既に明らかにされているところであり、(惑星系を「世界」として理解した上での)「世界の複数性」のイメージは、カントにおいてもエピクロス主義によって支えられる。しかしまた一方でカントは、時間の歴史的枠組みという問題に関して、始原からの世界の生成をせいぜい六千年とみる「普遍史」の枠組みを超えた、ステノーライプニッツ経由の少なくとも数万年単位の歴史的時間からさらに進んで、アリストテレス的な円環的時間という、人間にはほとんど無限とも思える時間のフォーマットを採用する。それによって示唆されるのは、惑星系と恒星系のほとんど無限の回帰的生成としての、時間の中での「世界の複数性」である。

カントは自らの「自然史」を「普遍的」と呼んだが、それは、ビュフォンの『普遍と特殊の自然史 *Histoire naturelle, générale et particulière*』(1749) を承けているからであり、重力という普遍法則によって、太陽系という特殊例に則して、宇宙全体の「自然史」を普遍的に描こうとしたためであった。ビュフォンとカントの「自然史」において、特殊と普遍を媒介するイメージが、「存在の連鎖」の古代的かつ新プラトン主義的な観念であり、「天界の理論」における「存在の連鎖」は、重力という普遍的法則によって支えられる。

この「存在の連鎖」の「自然史」を本来完成させるであろう、有機的存在そのものを普遍的に形成する原理は、カントの同時代人ヘルダーであれば「有機的諸力 organische Kräfte」となり、ヘルダーの場合、「有機的諸力」を根拠に地球上の人間の、他の天体への転生が夢想される。カントはそのヘルダー批判（1784）にあるとおり「有機的諸力」を認めず、その代わりに、「存在の連鎖」における知性的中間項としての地球上の人間存在の意義は、転生ではなく、類としての完成にあるとする（『惑星系市民の観点における普遍史というものについて Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht』1784）。ここに新しい「普遍史」が目的論的な意味をもって要請されることになる。カントの「普遍史」は、人間という類における理性の完成が、他の天体上の知性的存在との比較において普遍的意味をもつとみる。カントの「普遍史」と「自然史」は表裏一体であり、人間という類は歴史の中で進化的に完成をみて「自然史」の中におさまるものと考えられている。無限の時空間を背景とした神聖なる歴史としての「普遍史」と、自然神学的な「自然史（博物学）」との融合、これがカントの「普遍自然史」である。

共通論題 II 報告 (4)

表象のアングルー抱き、漂い、移ろうー

深貝 保則 (横浜国立大学)

近代における「古代表象」をめぐる演劇、政治および自然史を軸とした 3 報告を承けて、共通論題コーディネーターのひとりとしていわば方法的に考えてみたい。3 報告はいずれも、古典古代についてはギリシアもしくはローマを念頭に置いている。ここでは、「近代」(それぞれの時点における「いま」)の側から「古代」が表象されるに当たっての、その時空感覚のありように焦点を当てたい。

17 世紀終盤から西欧とくにフランスを中心に表出した古典古代像についていえば、いわゆる新旧論争は近代の側から抱かれる古代のイメージもしくは理念型をめぐるもの、古代と近代とのあいだの時間を隔てた優劣比較であり、さらには「いま」への診断であった。これに対してローマ帝国盛衰論は経緯、趨勢もしくは段階性をこそ問題にし、この点ではスコットランド啓蒙に典型的な 4 段階論もそうである。ここにみられるように、古代から「いま」に至る時間の取り方には、顕著な違いがある。

ギリシアやローマを念頭とした古代表象や、それに潜む「いま」への診断はいずれも、時間を隔てる複数の文明のあいだでの見立てであったが、近代における時間感覚は、これだけではない。まず、文明ならざる「自然状態」や「未開」を想定し、それとのコントラストで「いま」としての文明を捉える議論が存在した。この場合にも論調は一様ではなく、たとえばホッブズが幾何学的手法を援用しつつ、「いま」の構造を描くためにある種の論理手続きとして自然状態を持ち出すのに対して、『不平等論』のルソーは無垢なる自然を描くことによって「いま」を告発する。同様に、いわゆる 4 段階論を踏まえる論者のあいだでも、歴史的趨勢のなかでの「商業社会」にポジ・ネガいずれの評価を下すのかという点での対立があった。古代の表象のなかに「近代」の側が見出したもの一。それは必ずしも歴史的な「事実」そのものの確認という関心ではなく、しばしば、ある像を抱くことを通じて「いま」についての何らかのメッセージを伝え、あるいはヴィジョンを得ようとするものであった。むろん民衆的な説話における時間感覚というものもあろうが、ここでは取り上げない。

およそテキストを「読む」という場合、西洋における教義解釈の長い歴史、あるいは東洋にいう訓詁学などの蓄積がある。近代になると、巧みな文献考証と並んでさまざまな「科学的証拠」との突き合わせのなかでテキストが読み解かれる。しかしここに、あらたな緊張が生じることとなる。もともと、テキスト解釈もしくは聖典編纂ということと、ある時代思潮の流れに乗り、あるいはユニークな解釈者(プロデューサー)を介して古典古代について抱かれ・示されるような表象とのあいだには、しばしば距離があり、あるいは緊張がある。さらに「科学」が指し示すことが、「信念」としての古典イメージと摩擦を起こすことさえ生じる。こうしてテキストを読み解くという意味での「論説」という営みと、実に多様な「語り」

として立ち現われる「表象」とのあいだには、スリリングな状況が生じることとなる。「表象」は不変にして普遍的なメッセージを伝えているような装いでありながら、その中身はまた、それぞれの時点もしくはスタンスにおける歴史的文化的思想的な刻印を色濃く帯びる、という次第なのである。